

## サッカーにおける戦術の発展傾向について —ワールドカップ 2006 の分析から—

孫 日 長澤 靖夫

キーワード：戦術、プレッシャー、イメージ

Tendency to develop soccer tactics  
— From analysis of 2006 World Cup —

Ri Sun and Yasuo Nagasawa

### Abstract

What is the problem of the Asian Soccer, and why did it not improve? There are many different factors, such as training, tactics. And the tactics was divided into a European style and South America style before. We focused on the role of the position in both Japanese and Korean team and Italian team. As a result, there were different tactics in those teams, such as European style and South America style, and it was found that both Japanese and Korean team had not enough free idea for their player.

Key words : tactics, Pressing, Personal allotment

### 1. はじめに

アジア地区のサッカーの問題点はどこにあるのか、なぜ改善されてこなかったのか。この問題はトレーニング、戦術など、様々な要素があると考えられる。世界サッカーとの格差をいくらかでも縮め、アジア地区の各国のサッカーが、互いに向上するために役立つような戦術の検討をしようとするものである。それぞれの国のチームに

よって、攻撃を得意とするチームと守備を得意とするチームとがあることが考えられる。特に戦術的な問題に焦点を当て、集団、グループ、個人の戦術と役割分担としてのシステム上について考察を試みようとするものである。また、本研究ではアジア地区の日本と韓国そして優勝したイタリアチームのポジション別役割分担の比較分析に重点を置いた。

## 2. 研究方法

文献調査、DVD分析、戦術の歴史、3チーム比較分析を行った戦術的な問題に焦点を当て、チーム、グループ、個人の戦術と役割分担としてのシステムについて比較考察を試みたものである。

### 研究対象

ドイツ・ワールドカップ2006、イタリア、日本と韓国と対戦した主なチームを対象とした。

## 3. 術語の解説

### ○戦略：

目的になる戦略はサッカーの試合は90分である。この時間内で自分のチームの選手がどのようなチームイメージで相手チームと試合するのかが戦略だと考えます。

### ○戦術：

戦術とは目的(戦略)を達成するためにチーム、グループと個人の動き。また、大きく分けると攻撃と守備の戦術であり、選手が「ゴールを奪う」「ゴールを防ぐ」縦105m、横68mのサッカー場の中で練習時と試合前のチームイメージを計画通りに実行するのが戦術だと考えることができる。さらに、その下にチーム、グループ、個人戦術がある。

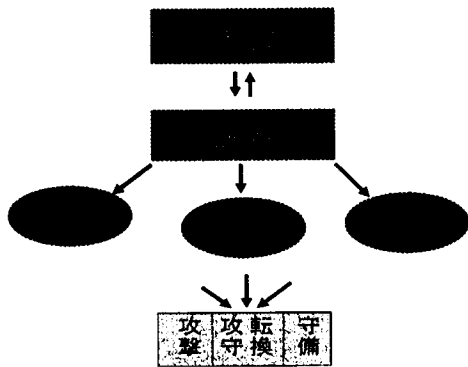


図1

上の図は戦術と戦略の関係をこのように理解したものである。

## 4. 今までの世界サッカーの発展傾向について

- イギリスでサッカー協会が創立以来、個人サッカーによるドリブル・ゲームに始まり、キック・アンド・ラッシュ、パス・ゲームへの発展に向かった。右の図2は最初のシステム1-9から4-2-4システムである。

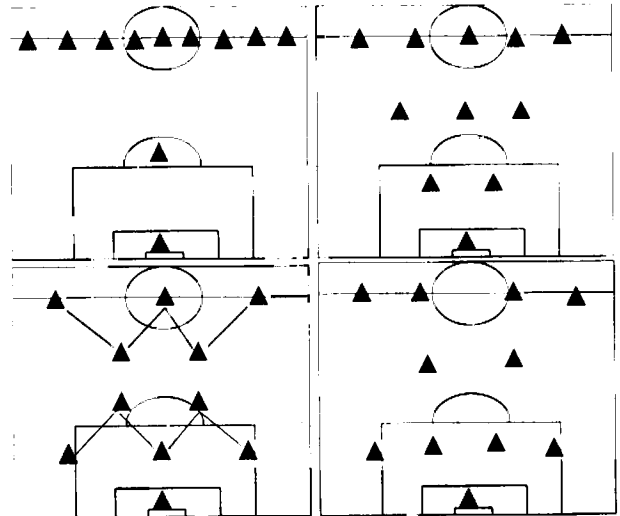


図2

- 1930年のWMとMMシステムが出現する。下のイギリスのWMシステムである。
- 1954年のブラジル4-2-4まで種々なシステムが出現する。
- 1970年までは個人の戦術能力に依存するサッカーであった。
- 1974年からトータルフットボールと呼ぶ、チーム全員が攻撃に参加し、守備に参加するサッカーとなった。

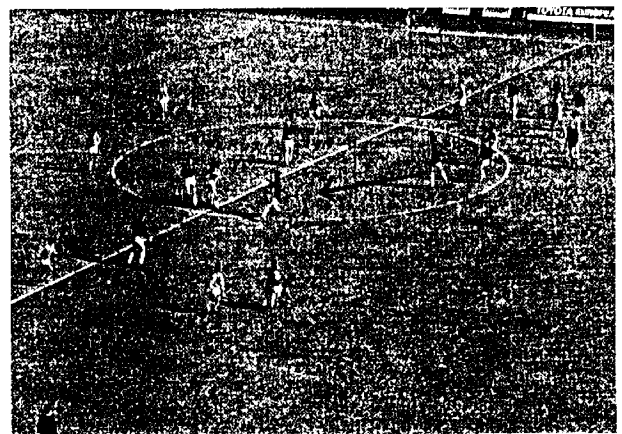


写真1

上の写真は瀧井の「ワールドサッカー戦術」から取った1994年ミランチームの試合状況である。両チームのこの図からは1994からもミランチームはプレッシングサッカーを使ったのが見える。

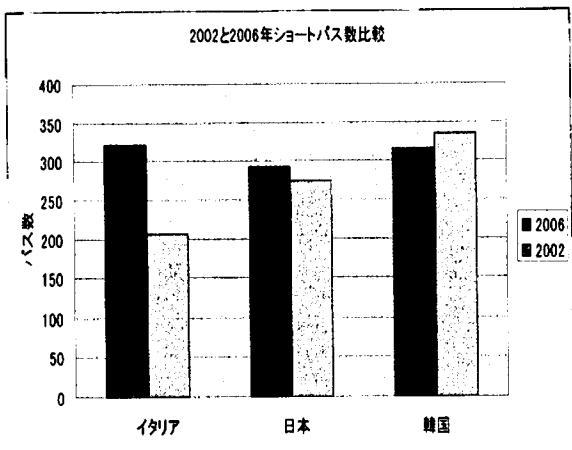
- 1998年フランスワールドカップからは、相手チームのゴール前からプレスをかけたり、早めにプレスを仕かけ30メートルから40メートルの狭いスペース内にプレッシングをかけるコンパクト・フットボール

とも呼ばれるようなサッカーとなった。これがプレッシング・フットボールである。

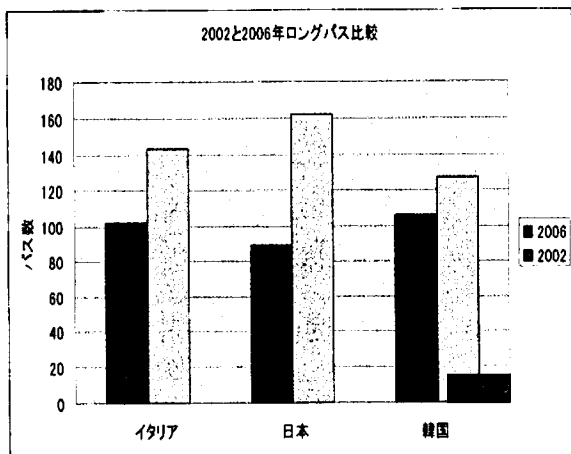
- ドイツ・ワールドカップ2006はイタリアチームの「クリスマスツリー型」と呼ばれる4ライン戦術が出現した。

### 5. ドイツ・ワールドカップ2006の分析

- ① 今回のワールドカップは全体的に見て、技術系のチームが明らかに優勢を占めた。4強に入った3チームが技術系チームで、イタリア、フランスとポルトガルである。これまでドイツチームはパワー系のチームと考えられていたが技術系への転向に向かって努力しているように感じられた。



グラフ1



グラフ2

上のグラフ2つは3チームが2002年と2006年のワールドカップの試合でパスの変化を調査した。

- ② 各チームは守備に重点を置き、全員で守備にあたりチャンスがあればカウンター攻撃をする。これが今回のワールドカップの傾向であると考えられる。ドイツチームも過去にはロングパスをあげるチームであったが、今回はゴール近くの30メートルに全員で戻って守備をするといった戦術的転向が観察された。各チームとも、戦術的に向上し、迅速な攻撃ができるようになり、そのために、守備力の強化が必要となった。このように攻撃と守備のバランスを保つために、守備の位置に人数確保の選手をミッド・フィルダーから下げさせ、攻撃に対抗させていることが観察された。

- ③ イタリアチームはクリスマスツリーと呼ばれるシステムを採用した。ツリー型システムの選手の配置を基盤として実際には両サイドミッド・フィルダーがセンターフォワードを軸として左右のポジションを交換する。そして、相手チームのディフェンスを中心に透導し、両サイドに有利なスペースを意図的に作り出していたといえる。更に、他のミッド・フィルダーは、もちろんのこと、両サイドのディフェンスまでが敵陣に入り、攻撃に参加することによって、人数的にも有利な布陣を引くことができたと考えられる。

- ④ 戦術から見ると日本と韓国は相反する問題が存在する。日本は相手がボールを持つときにプレスができない。ディフェンスラインとミッド・フィルダーラインが戻りすぎて相手に十分なスペースを与えてしまっていること。逆に韓国は守備には特に問題がなかったが、攻撃のときボランチラインは攻撃を手伝うができなかった。最後のスイス戦だけはひとりボランチを使って守備グループと攻撃グループの間にスペースが見られた。

- ⑤ 今回のワールドカップでは予想していたような攻撃的サッカー全盛の大会にならなかった、逆に守備的技術系サッカーの堅守からのカウンターアタックが最も有効的な戦術であること。そして、勝利への近道であるということが再確認された。



写真 3



写真 4

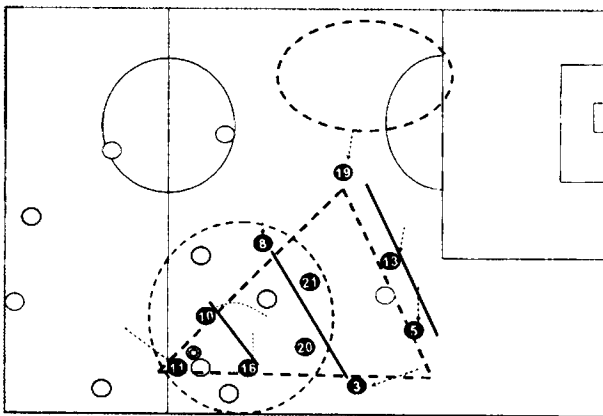


図 4

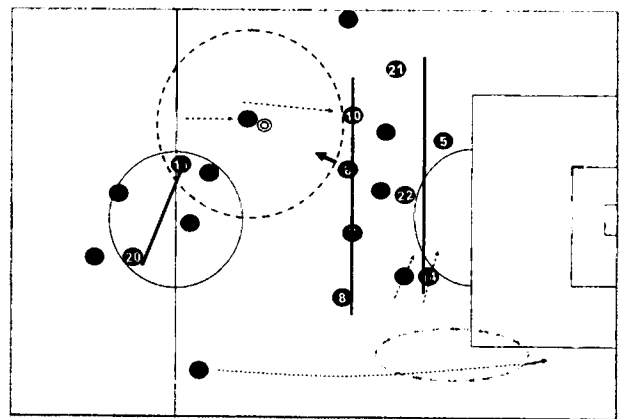


図 5

上の写真はイタリアチームと日本チームの守備布陣状況である。

イタリアチームの守備は中心をボールを持った選手に積極的にプレッシャーをかけることに重点を置いていたこと。

日本の中盤の選手は一生懸命戻すが、守備をしないうまま傍観することになった。

## 6. まとめ

戦略の歴史考証からは戦術の変遷が明らかとなり、これまでは欧州流と南米流といった戦術が考えられてきた。それぞれのチームの個人の能力を考慮して分析考察を進めた結果対象となった3チームのパス状況、ミッド・フィルダーのタックル数、個人の役割分担などから見えてきたように、日本と韓国の選手たちには試合時の自由な発想が見られなかったといえる。

## 引用、参考文献：

- 1) 朝岡正雄：スポーツ科学辞典、大修館書店、1993
- 2) 朝岡正雄：スポーツの戦術入門、大修館書店、1998、p22
- 3) 朝岡正雄：運動学用語解説、大修館書店、P 275 ~ P276
- 4) 松木安太郎：サッカーの戦術、新星出版社、P 10
- 5) 瀧井敏郎：運動学講義、大修館書店、1990、P76 - P87
- 7) 瀧井敏郎：ゲーム運動観察—サッカーにおける写真によるゲーム運動観察—、東京学芸大学、1989
- 8) 瀧井敏郎、檜山康：ワールドサッカーの戦略—プレッシング・フットボール—、特集サッカー、2006
- 9) 瀧井敏郎：サッカーにおける守備の基本戦術に関する事例的研究、東京学芸大学紀要、1987
- 10) 瀧井敏郎：学習の適時性にあったサッカーの内容、学校体育、第42巻、第10号、日本体育社、1988.
- 11) 湯浅健二：闘うサッカー理論、三交社、1995、P51